



# 教職大学院

# Newsletter No. 149

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2021.6.19

## 実践し省察するコミュニティ

## 実践研究 福井ラウンドテーブル 2021

## VIRTUAL (Online) SUMMER SESSIONS 特集号

Cyber Space Co-inquiry and reflection with Zoom

**実践し  
省察する  
コミュニティ**

*Round Tables:  
Summer Sessions  
for Reflective Practice  
and Organizational Learning  
in University of Fukui*

*For Communities of Practice and Reflection since 2001*

実践研究 福井ラウンドテーブル  
2021 Summer sessions  
19(sat) 10:00-17:40  
20(sun) 8:20-14:00  
Cyber Space Co-inquiry and reflection with Zoom

探究する学びを実現する教師  
教師を支える教職大学院  
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/  
実践と研究を結ぶ  
新しい実践研究組織とそのネットワーク

**2021.6.19-20**

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院  
福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科  
共催 社会教育実践研究フォーラム  
後援 福井県教育委員会、独立行政法人国際協力機構(JICA)

### 内容

- 福井大学連合教職大学院のラウンドテーブルに寄せて (2)
- 全体スケジュール (4)
- 教職大学院改革特別フォーラム (5)
- ZoneA1/A2 学校/インクルーシブ (6)
- ZoneB 教師教育 (7)
- ZoneC コミュニティ (8)
- ZoneD International (9)
- ZoneE 探究：学びと教えのニューノーマルを“きょうそう”探究する (10)
- Round Table Cross Sessions (11)
- 実践し省察するコミュニティを結び支える (12)
- ラウンドテーブルの歩み (14)
- 福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グローバルコミュニティへの誘い (16)
- アーカイブ (18)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2021年6月の開催をもって41回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。今回は、オンライン（Zoom）にてVIRTUAL (Online) SUMMER SESSIONSを開催いたします。6月19日（土）には、教職大学院改革特別フォーラム、5つのテーマに即したZONE SESSIONS、6月20日（日）には小グループ（5名程度）で実践を丁寧に語り聴き合うROUND TABLE CROSS SESSIONSを行います。

### 【Zoomを用いたオンラインのバーチャルセッションについて】

参加申込時の登録メールアドレス宛に以下の日程でご連絡差し上げます。

- (1) 6月18日（金）：6月19日（土）申込ZONEごとのZoom URLをお知らせします。
- (2) 6月19日（土）：6月20日（日）ラウンドテーブルのZoom URLをお知らせします。

\*Zoom URL が未受信の場合には [dpdfukui@yahoo.co.jp](mailto:dpdfukui@yahoo.co.jp) 宛に所属・氏名を添えてご連絡ください。

\*両日ともに Zoom ブレイクアウトルームの設定がございますので、できるだけ「Zoom 接続開始」時間までに Zoom ミーティングに入室してください。運営サポートにご協力をお願いします。

この2日間は、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しております。

## 福井大学連合教職大学院のラウンドテーブルに寄せて

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

副研究科長 淵 本 幸 嗣

私たちは、変化の激しい VUCA の時代を生きているのだということを今、コロナ禍によって実感されている人も多いのではないかと思います。VUCA とは、「激動」「不確実」「複雑」「はっきりしない」というような言葉からなる造語ですが、近年、活字や報道等で目にしたり、耳にしたりすることも増えてきました。まさに今、私たちは、先を見通しにくい時代を生きているのです。子どもたちは、その混沌とした時代をこれから生き抜いていかなければならないわけで、学校教育の果たす役割は、益々重要になってきています。

福井大学連合教職大学院では、未来の教育を見据えた学校づくりについて、年度当初の月間合同カンファレンスで「OECD2030 ラーニングコンパス」や中央教育審議会の「令和の日本型学校教育」の諮問文等を読み合い、語り合う中で、目指す方向性を確認し合い、それぞれの学校の状況や課題、具体的なアプローチの方法等について、互恵的に学び合っています。

- ・自分たちの学校は、これまでどのような実践をしてきたのか。
- ・何が課題となっているのか。
- ・何を目指そうとしているのか。
- ・自分たちに何ができるのか。

月間合同カンファレンスの中で他者の実践をじっくりと聴き、自分の実践についても語ることで、これまでの実践の問い直しが始まり、今後の展望も少しずつ拓けていくようになります。そのような経験をした上で、今回のようなラウンドテーブルで、より多様なメンバーと対話をするこの意味は、更に大きなものがあります。改めて実践を深く掘り下げて考える時間の中で、実践者は自分自身の学習の歩みを捉え直す評価の機会を持つことができますからです。結果として、自分自身の実践をよりナラティブに語れるようになるということは、教師としての確かな成長の証だと考えます。福井大学連合教職大学院では、ミッションの一つに卓越した高度専門職業人の育成を掲げていて、このラウンドテーブルがその有効な学びの場となっています。

令和3年度の教育活動が始まって2か月余りが経過した今、普段はあまり顔を合わせることもないメンバーと、地域、年齢、専門等の壁を越えたクロスセッションを経験することに胸躍らせている人がいることでしょうか。中には、自分の実践を語ることに不安で、ドキドキしている人もいるかもしれません。ここで大切にしたいことは、発表者に寄り添って、その実践の歩みを伴走者のようにしっかりと聴くという姿勢です。このことさえ共有すれば、ラウンドテーブルは、参加者にとって心地よい時間になると思います。福井大学連合教職大学院では、開設の時からずっと変わることなく、このように世代を超えた学び合いの取り組みを大切に、継続してきました。年間のカリキュラムの中に、学習者としての問い直しの機会を盛り込んでいるのです。

教師は、高度専門職業人として生涯にわたり仲間と共に学び続けることで、資質能力を高め合わなければなりません。このことは、福井大学連合教職大学院が開設されたころに、信濃教育会教育

研究所長の稲垣忠彦先生が福井の地に来てくださって、パネルディスカッションの中で話された時に強調されたことでもあります。稲垣先生は、「教師が成長するためには、授業を公開して、仲間と授業研究会を続けて、互いに学び合い、そのことを実践記録としてまとめる以外に方法はない。」と、実に明快に教師教育、教師の力量形成について話をされました。そして、稲垣先生には、福井大学連合教職大学院のラウンドテーブル等の取り組みを高く評価していただきました。大正期の新教育運動で福井県の先人たちが果たした役割にも言及され、「今、福井が教職大学院の旗を掲げて教師教育をリードしていくことは、何ら不思議なことではなく、先人たちも喜んでいることだろう。公教育の発展のために、ぜひ頑張ってもらいたい。」と励ましていただきました。

福井大学連合教職大学院では、省察的実践者として、自身の実践の展開を長期のスパンで振り返り、意味づけることを、年間を通して繰り返し、繰り返し、意図的に練り上げる仕組みを構築しています。その中でラウンドテーブルは、教師の成長にとって貴重な機会、大きな転機となるステージとして、重要な意味合いを持っています。このことは、修了生の長期実践研究報告書から読み解くことができるわけで、貴重な評価のエビデンスになっています。機会があれば、この実践記録を是非、手に取って読んでいただければと思います。

未来の教育においては、学び手としての教師の役割が、一層重要になります。そのための仕組みづくり・システム作り・実践コミュニティの組織化は、プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティの実現に向けた重要な仕掛けづくりでもあります。ラウンドテーブルを大きな学びの場として位置付けることは、福井大学連合教職大学院の組織マネジメントならびにカリキュラムマネジメントを語る上での大きな特色といえます。福井を中核として、全国に分散型の実践コミュニティが広がり、協働で互いの実践を高め合う至極の時間をこのラウンドテーブルに参加された皆さんとともに味わってみたいと思います。

## 実践研究

### 福井ラウンドテーブル

## 2021 Summer sessions

The 20th anniversary year of Round Table Cross Session  
in University of Fukui since 2008

6/19(sat) 10:00-17:00 (zoom 接続開始 9:30)

教職大学院改革特別フォーラム *Session I* 10:00-12:00

「理論と実践の融合」への企図 その現段階(2)

学校・教育・地域を考える 5つのアプローチ *Zone Sessions* 13:00-17:00

- A1/A2 学校/インクルーシブ:21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う  
ー多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校在り方を探るー
- B 教師教育:働き方改革と学び合う学校づくり  
ー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー
- C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする  
ーコロナ禍において学びをつなぐー
- D International Initiatives on Teacher Education Reform  
Different Approach to ‘Reflective Lesson Study’
- E 探究:学びと教えのニューノーマルを”きょうそう”探究する  
ーたのしい学校をデザインするー

17:30-18:10 省察的実践学会総会

6/20(sun) 8:30-14:00 (zoom 接続開始 7:50)

### *Session IV* Round Table Cross Sessions

#### 実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。

言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。

話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く育まれていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため8:30-14:00の全日程を6人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として8:30-14:00の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしく願いいたします。

7:50- 8:30	接続
8:30- 8:40	オリエンテーション
8:40- 9:00	自己紹介&アイスブレイク
9:00-10:40	報告 I
10:40-11:40	報告 II
	～ランチ・ブレイク～
12:20-14:00	報告 III

6/19 (sat) 10:00-12:00 (zoom 接続開始 9:30)

教職大学院改革特別フォーラム

## 「理論と実践の融合」への企図 その現段階 (2)

教職大学院の展開をめぐる当事者としての省察と展望のために

不確定性が加速化する状況の中で避けがたい社会組織の再構成を主体的・協働的に担っていく主体として力、そしてそのために求められる学習をどのように培っていくか。状況と課題を共有する世界で進む公教育改革への企図において、そうした学習を支える教師のあり方、そして学びに関心が寄せられてきている。OECD の Education2030、世界銀行の SABER においても、その焦点へのアプローチが進められている。そして日本においても 3 月 12 日の“「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について”の諮問を受け、中央教育審議会に特別部会が設置され、4 月より教師教育を主題とする包括的な協議が始まっている。「理論と実践」の融合・往還を基軸に教師教育改革を先導する役割を担って出発した教職大学院の企図、そこでの実践とそれを通じた理論の真価が問われることになる。

2 月に行われた実践研究福井ラウンドテーブル特別フォーラム(「理論と実践の融合」への企図 その現段階)では、信州大学教職大学院における学校拠点の取り組み、大阪市教育委員会が大阪教育大学との協働で進めている現職教員の研究・学習のためのセンターの取り組み、福井県教育総合研究所が進めている世代を超えて教師が実践者として学び合う研修サイクルの取り組みをめぐる実践報告を受け、理論と実践の融合・往還の具体的な展開とそれを通しての実践者としての長期的な力量形成のプロセス・デザインへの問い、そして学習観の転換を支える教師自身の学習観の転換という重要な課題が提起されてきている。

第 2 回目となる今回は、教師教育改革をめぐる上述のような状況と課題を踏まえつつ、「理論と実践の融合・往還」を軸とする取り組みを教職大学院・学部・学校を結んで展開している実践とそこでの具体的な学びを紹介いただきながら、学習観の転換を支える教師の長期的な学習プロセスとそれを支えるカリキュラム・組織、さらにはその評価の在り方、カリキュラム・組織の担い手の力量形成へと問いを進めていくこととしたい。

<趣旨説明>	福井大学 理事(企画戦略担当)・副学長	松木 健一
<報告 1>	兵庫教育大学大学院学校教育研究科 教授	山中 一英
<報告 2>	岐阜大学大学院教育学研究科 教職実践開発専攻 教授	石川 英志
<報告 3>	福井大学大学院連合教職開発研究科 准教授	遠藤 貴広
	福井大学大学院連合教職開発研究科 准教授	笹原 未来
	福井大学大学院連合教職開発研究科 准教授	隼瀬 悠里
<提案>	福井大学大学院連合教職開発研究科長・教授	柳沢 昌一
<コメント>	文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 教員養成企画室長	齋藤 潔
<司会>	福井大学大学院連合教職開発研究科 客員教授	寺岡 英男

(敬称略)

# 6/19 (sat) 13:00-17:00 (zoom 接続開始 12:00)

学校・教育・地域を考える6つのアプローチ

## Zone A1 A2 学校/インクルーシブ

21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

—多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校の在り方を探る—

Zone A は、これまで「専門職の学び合うコミュニティ (Professional Learning Communities)」を培う学校改革の在り方を検討してきました。その中で「21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」というテーマを掲げ、学校が持続発展していくための教師協働の在り方について議論を積み重ねてきました。特に、学習コミュニティの学びを深めていくためには対話の質を高めることが重要であることについて注目してきました。一方、Zone F は「多様な子どもたちの学びと育ちを支えるコミュニティを培う」というテーマで、すべての子どもがあるがままの存在として生き育つことのできる教育について検討を始めました。二つの Zone の視点は、教育・保育を考える上で極めて重要だと言えます。

そこで、実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Summer Sessions では、Zone A と Zone F の取り組みを融合して検討します。具体的には、一人ひとりの子が個性や能力を発揮し、学び合い育ち合う学校を実現するには「主体的・対話的で深い学び」をどうデザインすればよいのか、そのために教職員が協働していく組織をいかに構築していくのかについて、参加者のみなさまと共に協働探究していきます。

**Connection** 12:00-13:00 接続

**Orientation** 13:00-13:10 オリエンテーション

**Session I** 13:10-15:10 **Webinar Symposiums**

「多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校づくり」

<シンポジスト>

長野県佐久市立佐久平浅間小学校	教 諭	松元 可南子
福井県小浜市教育委員会	企画主査	小坂 恵
福井県立南越特別支援学校	教 諭	山下 久美子
福井県立武生高等学校	教 諭	小林 就彰

13:10-15:10 全体討議

<コーディネーター>

福井大学連合教職大学院	准教授	宮下 正史
-------------	-----	-------

(敬称略)

15:10-15:30 <休憩>

**Session II** 15:30-17:00 **Webinar Breakout Room 現状共有と明日への展望 Cross-session**

Session I の議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。小グループ形式で対話を編み込み、実践をデザインし、展望を生み出します。

# Zone B 教師教育

## 働き方改革と学び合う学校づくり

### －組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメント－

今日の学校教育には、これからの変化の激しい時代において持続可能な社会の担い手となる子どもたちの資質・能力を育むため、主体的・対話的で深い学びの実現など、教育の質的転換・向上が求められています。また、教員の大量退職に伴い、若い世代の教員を支え育てる組織づくりも必要とされるなど、学校は大きな変革のなかにあります。他方で、働き方改革も急務とされています。こうした状況のなかで教育に携わる者の多くは、教育の質的向上と働き方改革とは一方を推進すれば他方が停滞するというディレンマに悩まされているのではないのでしょうか。

Zone B「教師教育」では、現状を克服し、教育の質的向上と働き方改革との両立を目指して、自治体における具体的な事例なども踏まえながら、行事の精選や教員の会議の削減などに止まらず、働き方改革を実現しつつ教育の質的向上を図るためのカリキュラムマネジメントや教師が学び合うコミュニティとしての学校のあり方について展望を拓いていきます。

コロナ禍が学校に様々な困難と同時に変化の機会をもたらしています。学校という組織のニューノーマルを探り、協働する組織、学び合う組織としての学校づくりが進んでいますが、今回の Zone B では、そうした新しい学校の姿を思い描きつつ、さらなる教育の質的向上と働き方改革との両立について、多様な実践を共有し、共に考えていきたいと思えます。多くの皆さまの参加をお待ちしております。

なお、今回もオンライン会議システム（Zoom）を用いて実施します。

**Connection** 12:00-13:00 接続

**Orientation** 13:00-13:10 ガイダンス

**Session I** 13:10-15:20 **Symposium**

<話題提供> 福井県教育庁教職員課長 竹澤 宏保

<実践報告> 福井県勝山市立鹿谷小学校長 北川 喜樹

東京都千代田区立麴町中学校教諭 羽生 裕美

福井県立高志高等学校長 吉田 繁

<進行> 福井大学連合教職大学院教授 淵本 幸嗣

(敬称略)

新しい学校の姿から、教育の質的向上や人材育成と働き方改革との両立を目指した実践を共有します。

**Session II** 15:20-17:00 **Forums**

実践報告を踏まえ、参加者それぞれが今後の実践にどのように生かすことができるか、小グループで協議します。

## Zone C コミュニティ

### 持続可能なコミュニティをコーディネートする

#### ーコロナ禍において学びをつなぐー

前々回（2020年6月）、Zone Cでは「コロナ禍状況におけるコミュニティの学びの展望を拓く」というテーマに取り組みました。当時は、コロナ禍という状況が私たちにどのような影響をもたらしているのかさえ明確に捉えきれていない状況でした。そのとき、初めてオンラインで開催し、これまで以上にたくさんの地域の方にご参加いただくなか、お互いが抱えている悩みや不安に耳を傾け、この状況にあっても実践を展開させる具体的な知恵を共有し合いました。その後もコロナの影響は収まらず、多くのコミュニティでの活動が、計画の変更や延期、中止を余儀なくされ、コミュニティの持続可能性が脅かされています。そうしたなかであっても、仲間とつながり合い実践を生み出すことを諦めないために、前回（2021年2月）では、「コロナ禍において学びをつなぐ」というテーマで、今、私たちにどのような学び合いが求められているのかについて考えました。そこでは、これまで私たちの社会がすでに抱えていた課題ー都市一極集中の限界と地域の過疎化、高齢者の孤立化、外国籍住民の孤立化、ジェンダー差別等ーが深刻化している現実に向けながら、それらを乗り越えようとする地域の取り組みや、この困難な状況であっても紡がれているコミュニティの実践から学び合いました。それは、あらためて自分たちのコミュニティの存在意義や活動の意味を問い直す機会ともなりました。

今回は前回のテーマを引継ぎながら、さらに問いを深めるために、次の3つの視点からコロナ禍における学びのつながりを考えたいと思います。

- コミュニティの学びをつなぐための実践
- 世代やコミュニティを超えた学びの実践
- そうした実践を支えるためのコーディネーター自身の協働の学びの実践

実践に学ぶことを通じ、コロナ禍前の状況にコミュニティを戻すことをめざすのではなく、むしろより豊かなつながりを築いていくために、参加者の皆さんと共に考え合いたいと思います。

**Connection** 12:00-13:00 接続

**Orientation** 13:00-13:15 自己紹介セッション

**Session I** 13:30-15:00

中山間地域の現状と課題・国際地域学部でのPBL活動・上味見地区での活動報告

話題提供： 福井大学国際地域学部 伊藤 勇・片山 留菜

コーディネーター：福井大学連合教職大学院 天方 和也

15:00-15:30 休憩

**Session II** 15:30-17:00

生徒と地域の方が目指す学校像を語り合うコミュニティ協議会の実践

ー新しい地域のまつりの創造『灯籠プロジェクト』ー

話題提供： 新潟市立葛塚中学校 上村 慎吾

コーディネーター：福井大学連合教職大学院 大橋 巖

[全体ファシリテーター] (**Session I & II**)： 福井大学連合教職大学院 富永 良史

(敬称略)

# Zone D International

## International Initiatives on Teacher Education Reform: Different Approaches to ‘Reflective Lesson Study’

The Sustainable Development Goals (SDGs) to be achieved by 2030 is to provide inclusive, equitable and quality education to all people and to promote lifelong learning opportunities. The importance of teacher education has been emphasized as one of the targets. In 2016, the United Graduate School of Teachers’ Professional Development, University of Fukui was commissioned to conduct JICA Knowledge Co-Creation Program on Lesson Study, and since then, we have continuously accepted requests for teacher training from Singapore, Thailand, Egypt, and Saudi Arabia. Given the above background, at the Fukui February roundtable in 2021, we launched Zone D International to provide a forum for collaborative reflection on practices and future prospects for teacher education reform overseas.

At the roundtable in February 2021, past trainees of JICA Knowledge Co-Creation Program on Lesson Study in Malawi, Uganda, and Ghana took the stage as symposiasts to share their experiences and challenges in establishing reflective lesson study in their respective contexts. On the other hand, we realized it is crucial to work on it from a long-term perspective through practice and reflection.

Therefore, we will focus on the Nalikule College of Education and its demonstration school in the Republic of Malawi and follow the process of their reflective lesson study. A total of eight trainees from the Republic of Malawi participated in JICA Knowledge Co-Creation Program on Lesson Study in Fukui, and follow-ups were conducted in 2017, 2018, and 2019. In this symposium, the panelists will discuss the approaches, results, and challenges of lesson study at Nalikule College of Education and its demonstration school, and the participants will share and learn from each other’s practices in small group discussions. This session will be conducted in English.

今回はマラウイ共和国のナリクレ教員養成大学及びその附属学校に着目し、省察的授業研究の取り組みの過程を追っていくことにします。マラウイ共和国からは、これまでにJICA課題別研修として合計8名の研修員を受け入れており、また2017年、2018年、2019年にフォローアップを実施してきました。さらに、2020年2月にはナリクレ教員養成大学と大学間協定を締結しています。今回のシンポジウムでは、ナリクレ教員養成大学及び附属学校における授業研究の取り組みや成果、課題等について話題を提供して頂き、参加者がそれぞれの校種や領域で具体的に実践を捉え直していきます。なお、本セッションは全て英語で実施します。

**Connection** 14:15-15:00 接続/Connection

**Session I** 15:00-16:00 **Symposiums**

Lesson Study in Nalikule College of Education and Its Demonstration School

<Panelist> Nalikule College of Education

<Coordinator> (TBD)

**Session II** 16:00-17:30 **Forums**

Sharing and learning from each other’s practices

17:30-17:40 Closing

Zone E 福井大学連合教職大学院 実践研究福井ラウンドテーブル 2021 VIRTUAL SUMMER SESSIONS

ご案内

2021年6月19日 (土)



世代をこえてこれからの教育を考えるバーチャル・セッション

「学びと教えのあたらしいすがたカタチをみんなでかんがえよう」

このたび、見出しのセッションをオンラインで開催します。子どもたちと若者たちと大人たちの学びあう関係にもとづいて、学びと教えのあたらしいすがたカタチについて、みんなでトークしながらかんがえていきます。たくさん子どもたちと若者たちと大人たちにご参加いただき、みんなの想いをいっしょに奏でて、それぞれの「学びと教えのニューノーマル」を描いていきたいと思ひます。

(1) 2021年6月19日 (土) のスケジュール

- 12:00-12:50 Zoom 接続
- 13:00-13:10 オープニング
- 13:10-14:30 おしゃべりカフェ + 「ぐ〜たら選手権」 ゲスト みんな
- ✦ 子どもたち・若者たちがおこなっている遊びや学びや探究を小さなグループの中で紹介してもらい、たのしくおしゃべりします。「ぐ〜たら選手権」つき。当日をおたのしみに^^
  - ✦ [遊びや学びや探究をくわしく紹介してくれる子どもたち・若者たちの個人/チームを大募集しています。](#)
- 14:40-16:00 トークSHOW! 司会 前田たけし先生 ゲスト 小中高生・大学生
- ✦ 「じゅぎょう・しゅくだい・せんせい・がっこう」をテーマに、小中高生・大学生とたのしくフリートーク（おはなし）をして、学びと教えのあたらしいすがたカタチについてかんがえてみます。
- 16:20-17:20 リトルトークSHOW! ゲスト みんな
- ✦ トーク SHOW のフリートーク（おはなし）をきいてかんがえたこと・かんじたことを、小さなグループの中で紹介しあおう。
  - ✦ 「明日からやってみたいこと・変えてみたいこと」をかんがえてはなしてみよう。

(2) 参加申込方法

下の URL・QR コード先のフォームから参加申込を6/15 (火) までにお願ひします。  
 参加申込フォームでは、5月・6月のプレセッション（準備会議）への参加もお尋ねしています。  
 子どもさんは、先生や保護者（親）に参加申込をおねがいしてもだいじょうぶです。

<https://forms.gle/KA5CMzeH1VSS8QZp7>



お問い合わせ先  
 福井大学連合教職大学院教授 木村 優  
 E-mail: u-kimura@u-fukui.ac.jp

# 2/20 (sun) 8:30-14:00 (zoom 接続開始 7:50)

## 実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

### Round Table Cross Sessions

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

7:50- 8:30 接続

8:30- 8:40 オリエンテーション  
ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。

8:40- 9:00 自己紹介&アイスブレイク  
それぞれが今取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。

9:00-10:40 報告Ⅰ

10:40-11:40 報告Ⅱ

～ランチ・ブレイク～

12:20-14:00 報告Ⅲ

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたらと思います。

## ラウンドテーブル

### 実践し省察するコミュニティを結び支える



2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

#### 実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かせるような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする問い組みとして始まる。

#### 実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実も動かしがたい。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の

展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

### 小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

### パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えはじめています。

(柳澤 昌一 『教職大学院ニューズレター』 No.11 2009.3.31)

### ラウンドテーブルの 4 重の意味

#### 4Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。  
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。  
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice  
I, II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。  
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ  
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning  
Communities for Reflective Practitioners

## 実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2021.2

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして  
木岡一明・寺岡英男（この回は教師教育をめぐる20人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった）
- 2001.11.10-11 実践研究：福井ラウンドテーブル 省察的実践を支える協働（第1回）  
**For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning.** 第1回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。（参加者20数名）京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第2回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志  
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る
- 2002.7.13-14 実践研究：福井ラウンドテーブル（省察的実践を生み出す 学び合う組織を編む）（第3回）
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル（第4回）  
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究：福井ラウンドテーブル（第5回）
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル（第6回） 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ：実践研究福井ラウンドテーブル2004（第7回）  
2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる（於熱海～2009）  
2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる（於早稲田大学）～現在に至る
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2005（第8回 参加者100名超）  
国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル2005（第9回）
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2006 フェニックス・プラザ（第10回）  
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル2006（第11回）三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫  
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2007（第12回）渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹  
2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル2007（第13回）藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008（第14回）横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル2008（第15回）人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2009（第16回）稲垣忠彦
- 2009.6.27-28 実践研究福井ラウンドテーブル2009（第17回）5つの領域：専門職として学び合うコミュニティ  
（分野ごとのセッション始まる）
- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2010（第18回参加者300名前後）鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル2010（第19回）：学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2011（第20回 参加者300名を超える）門脇厚司・森透
- 2011.6.25-26 実践研究福井ラウンドテーブル2011（第21回）松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
- 2012.3.3-4 実践研究福井ラウンドテーブル2012 spring sessions（第22回）（名称を変更する）

- 2012.6.23-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions (第23回) 参加者 450名を超える  
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2013.3.2-3 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions (第24回) 教師教育改革コラボレーションとの共催
- 2013.6.29-30 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions (第25回)  
11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013 winter sessions (明治大学)  
2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム (宇都宮大学) 1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 2014.3.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第26回) 参加者 550名を超える
- 2014.6.21-22 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions (第27回)  
11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)  
11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、 12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)  
2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム、 3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
- 2015.2.27-3.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions (第28回) 参加者 700名を超える
- 2015.6.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions (第29回)  
11.21 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)  
11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 12.6 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)  
12.19 教育実践福島ラウンドテーブル、 2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム、  
2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2016.2.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions (第30回) 参加者 800名を超える  
生徒ポスターセッションを開催
- 2016.6.24-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions (第31回) 参加者総数 547名  
7.8 記念講演&シンポジウム (和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル)  
11.12 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)  
11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)  
2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015  
2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
- 2017.2.17-19 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions (第32回) 参加者 800名を超える  
特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催. 省察実践学会の発足
- 2017.6.23-25 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions (第33回) 参加者総数 566名  
10.14 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園)、 10.15-21 マラウイラウンドテーブル  
11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、 11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学  
12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 2018.2.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 spring sessions (第34回) 参加者総数 627名
- 2018.6.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 summer sessions (第35回) 参加者総数 476名  
10.20 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園)、 10.23 マラウイラウンドテーブル  
11.17-18 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 11.22-23 教育実践研究フォーラム in 奈良  
12.15 実践研究ラウンドテーブル in 静岡大学  
12.22-23 実践研究東京ラウンドテーブル (東京学芸大学)  
2.9-10 宇都宮大学教育実践フォーラム
- 2019.2.15-17 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 spring sessions (第36回) 参加者総数 930名
- 2019.6.21-23 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 summer sessions (第37回) 参加者総数 426名  
9.28-29 札幌ラウンドテーブル、 10.23 マラウイラウンドテーブル、

- 11.16-17 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.9 教育実践研究フォーラム in 奈良、  
12.15 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)  
2.8-9 宇都宮大学教育実践フォーラム  
2020.2.15-16 実践研究福井ラウンドテーブル 2020 spring sessions (第 38 回) 参加者総数 800 名程度  
3.3-4 ウガンダラウンドテーブル  
2020.6.20-21 実践研究福井ラウンドテーブル 2020 summer sessions (第 39 回) 参加者総数 500 名程度  
11.21 東京サテライトラウンドテーブル  
11.21 関西ラウンドテーブル  
2021.2.20-21 実践研究福井ラウンドテーブル 2021 spring sessions (第 40 回) 参加者総数 550 名程度

## 福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グローバル・コミュニティへの誘い<sup>いざな</sup> ラウンドテーブルの広がりと深まりを通して

福井大学連合教職大学院教授 木村優

新しいミレニアムが幕をあげたばかりの 2001 年 3 月、教師教育にかかわる 20 名程の実践者・研究者が福井に一堂に会し、互いの教育実践研究を交流し合う研究会が催されました。この研究会のテーマは「教師の実践的力量形成をめざして」でした。このテーマのもとで解き放たれた熱い議論が、現在、福井大学連合教職大学院が毎年 2 月と 6 月に開催している実践研究福井ラウンドテーブルを生み出しました。

あれから十数年間、福井大学連合教職大学院は福井県内外と国内外の学校や教育機関との交流・往還を積み重ねてきました。そして、21 世紀の教育の実現に向けた学校と教師の挑戦を支援すべく、実践研究福井ラウンドテーブルを大黒柱にして実践コミュニティ<sup>1</sup>を耕し続けてきました。

実践研究福井ラウンドテーブルでは会を重ねるごとに、参加者の実践報告が多様な色彩を帯びていています。ラウンドテーブルの創世記には数人の教師たちによる実践報告に限られていました。しかし現在では、教師の教育実践の報告や学校改革の挑戦過程から、教育研究者による学校との協働研究、医療・福祉における省察的実践への挑戦、学生・院生の大学(院)におけるプロジェクト学習の展開、地域の人々による学校・家庭の教育支援、海外学校での新しい教育実践への挑戦、そして、小中高生によ

る自らの学びの軌跡についての報告に至るまで、多彩な実践が毎回のラウンドテーブルで交流されているのです。

この間、教育研究の飛躍的な前進を足がかりとしながら、「教育の質保証」と「学びの転換」を目指したさまざまな施策が矢継ぎ早に打たれるようになりました。アクティブ・ラーニング、チームとしての学校、コンピテンシー・ベース、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学び等々といった新しい改革用語が流布するように、学校と教師、そして子どもたちには実に多くの変化が求められています。これらの求めは、超スマート時代(Society5.0)、超 AI 時代、VUCA<sup>2</sup>ワールド等と呼ばれる新しい時代における、あらゆる個人とすべての社会の幸福を実現するための、私たち人類の挑戦の現れと言えるでしょう。

このような変化の激しい時代の教育改革期では、学校、教師、子どもたちの豊かな学びと確かな育ちをサポートする機構が必要になります。学校も教師も子どもも、それぞれが孤立するのではなく、つながり合い、支え合い、協働することで変化に向けた挑戦が可能になるのです。そこで、福井大学連合教職大学院は現在、21 世紀のあらゆる実践者、研究者、そして子どもたちの挑戦を支え促すための省察的機

<sup>1</sup> あるテーマについての関心や熱意等を共有して、それぞれが所属する分野・領域の知識や技能を相互に持続的に交流し、深めていく集団や組織のこと(ウェンガー・マクダーモット・スナイダー, 2002)。

<sup>2</sup> 現代社会の特徴を表す 4 つの言葉: Volatility (不安定)、Uncertainty (不確実)、Complexity (複雑)、Ambiguity (曖昧)の頭文字をとった造語。

構<sup>3</sup>としての実践コミュニティとして成熟を遂げようとしています。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの、文字通り「実践の省察」を支え促すことを最重要のビジョンとして描きます。このビジョンを基盤とした実践研究福井ラウンドテーブルでは、そこに参加する日本全国・世界各地の実践者や研究者は当然、それぞれ福井大学連合教職大学院とは異なるコミュニティ、あるいは複数コミュニティに属していて、それぞれのコミュニティの中で変化を生み出す新たな実践に挑戦しています。つまり、実践研究福井ラウンドテーブルは、イノバティブ（革新的）なローカル・コミュニティが集合する大きなコミュニティの「坩堝（るつぼ）」なのです。

もしも、このコミュニティの中で数多くあるローカル・コミュニティがイノバティブな実践をベースにして結びつき、そこでコミュニティ間のネットワークが広がり、協働が加速すると、いったい何が起きるのでしょうか。それはおそらく、誰も見たことのない新しい知の創造であり、新しいかかわりの現れです。この新しい「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、広がるほど、現代社会を取り巻く困難や未来社会に予測される問題を突破するいくつかの「ソリューション（解）」が生み出される可能性が高まります。ただし、「知」と「かかわり」のダイナミクスを大きくし、それらのイノベーションの質と価値を深めるためには、「戦略」が必要になります。ただ指を咥えて待っているだけでは、ダイナミクスやイノベーションは起こらないのです。

福井大学連合教職大学院では、これまでの実践研究福井ラウンドテーブルの展開で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携して、分散型コミュニティのデザインに着手し始めました。もしも、複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで、「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そして、そこで互いの課題や問題を見つけ出し、それらの解決策を考え出して共有可能な「知」を蓄積することができれば、それぞれのコミュニティが分断することなく連動して各地の「挑戦」を支え合い励まし合うことが可能になると考えたためです。

すなわち、日本全国・世界各地にあるローカル・コミュニティを結びつけて、各コミュニティの相互作用による変化を生み出すために、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことができる分散型のコミュニティ構造をデザインしていくのです。福井大学連合教職大学院の分散型コミュニティへの挑戦とはつまり、現代社会と未来社会に生きるすべての人々の学びと育ちを支える、教育改革のグローバル・コミュニティを築く戦略なのです。

2014年度から、福井大学連合教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島でラウンドテーブルが開かれるようになりました。その後、ラウンドテーブルは奈良や長野でも産声をあげ、各地の学校の校内研修にも広がっていきます。2017年度には福井大学連合教職大学院とJICAとの連携を基盤として、アフリカのマラウィでラウンドテーブルが始まりました。日本各地そして世界のラウンドテーブルで引き出されはじめた教師たちの教育への熱誠、子どもたちの学びへの希望、そしてすべての人々の幸福への追求が、新たな省察的機構としての実践コミュニティを各地に創発していくことになることでしょう。

福井大学連合教職大学院ではこれまでも現在も、私たちのコミュニティ、そして分散型のグローバル・コミュニティに参加くださるあなた（ピア）を求めています。ぜひ、私たちとのかかわりを通して、そして実践研究福井ラウンドテーブルを通して、21世紀を革新する教育のあり方についてともに考え、すべての人々が幸福を追求できる未来社会をともに築いていく、この挑戦に多様多層に同行いただけると幸いに思います。

<sup>3</sup> コミュニティの組織学習を支え、コミュニティのメンバーの実践の省察を励ます組織＝機構のこと（ショーン, 2017）。

# Archive —アーカイブ—

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011 と、ラウンドテーブル 2017 Summer Sessions に参加していただいた方の報告を、Newsletter No.34 (11.07.28) と No. 106 (18.02.04) からご紹介いたします。

Newsletter No.34 (11.07.28) より

## ～渡日生(外国人生徒)の教育保障をめぐって～

大阪府立門真なみはや高等学校 大倉 安央／白石 素子

今回、福井ラウンドテーブル 2011 に参加するにあたって、他の学校の実践とどのように交わることができるのか、楽しみと不安がありました。これまでも外国人教育にかかわるシンポジウム、研修会などでは発表や講演を行ってきましたが、今回はいわば「異種格闘技」。私たちの実践がどのように受け止められるのか、また他の学校の実践から何を学びとれるのか、そんな「期待」を抱いての参加でした。

永住目的で来日した子どもたちは保護者の都合で日本に来ました。もちろん、日本語はできず、日本のこともほとんど知らないまま、日本の土を踏んだわけです。いきなりの日本の学校文化にそう簡単になじむことはできません。しかし、馴染みのないこの地で生きていかなければならない子どもたちは必死で生き抜きます。

いわゆる「留学生」ではないこの子どもたちの存在福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻 The Challenge of Distributed Communities of Practice and Reflection 3 に、まずは気付いてほしいと思いました。そして、日本で生きていく力としての日本語と、自らの「存在証明」としての重みを持つ母語の継承・発展、これこそが渡日生教育の両輪であることを、私たちの発表でお伝えしたい、そういう思いで参加しました。

私たちは学校（公教育）における母語保障を重要と考え、正規の授業として母語の授業を開講しています。

母語保障の重要性の第一は、アイデンティティに関わる問題です。自分のルーツに自信を持たせるようにしたいのですが、経験的に言っても、母語を忘れる子どもほどルーツを隠すようになります。自分の言葉である母語を維持することは、自分とは何かをしっかりと考える際に、極めて重要なファクターと

なります。第二に、保護者の方は生活に追われ、日本語の習得は困難なことが多いのですが、子どもは学校生活を通じて日本語を覚えていきます（それとともに母語を失っていきます）。その行き着く先は…親子間で言葉が通じなくなるという悲劇です。第三に、日本社会ではバイリンガルの人材が求められています。この子どもたちこそがバイリンガルとして成長していくのではないかと思います。「日本語ができない生徒がやってきた！」と慌てるのではなく、「〇〇語ができる生徒がやってきた」ことをこそ喜ぶべきでしょう。

今回のラウンドテーブルで、これまで学校における学びの在り方を様々な面から実践されてこられた皆さんに、私たちのささやかな実践がどのように伝わったのか、心許ないばかりです。分科会で一緒にさせていただいた藤島高校のSSHの取り組みでは、自分で設定した課題に主体的に取り組む生徒の姿が印象的でした。session2の松本先生のお話からは、「子どもの問題解決を支える授業」の在り方や苦労しながらも「子どもの育ちを実感する」教育の姿に、自分たちの実践を重ね合わせながら気づかされるが多々ありました。

現場と連携した福井大学教職大学院の実践から生まれたのがこのラウンドテーブルであると思いますが、そうした福井大学の取り組みにも敬意を払います。あの場に同席できたことに感謝いたします。

### 参考文献

『文化間移動をする子どもたちの学び』（斎藤ひろみ・佐藤郡衛編、ひつじ書房）所収「高校への進学と学習機会」

『高校を生きるニューカマー』（志水宏吉編、明石書店）所収「門真なみはや高校—普通科総合選択制におけるアイデンティティ保障の取り組み」

## 私にとってのラウンドテーブル

東京学芸大学附属世田谷小学校 岸野 存宏

今回のラウンドテーブルの解説で真っ先に気になったのは、「実践の長い道りを語り、展開を支える営みを聞き取る」という文章であった。いわゆる「研究授業」に参加・参観すると、その場だけが語られることが多い。しかし、授業を考えるためには、一人一人の子どもの背景、教師の願いと手立ての蓄積、その子どもたちと教師との長いかわりといったものに視線を向けていくことが大事だと私は考えている。一つの授業を45分だけではなく、「長い道り」ととらえようとする、その場で見えるものだけではなく「展開を支える」ものに目を向けようとしていること、ここにまず興味と共感を覚えた。

教職大学院の方の司会でラウンドテーブルが始まった。まずは自己紹介。5分間自分のことを語る。普段はあまりすることがない経験である。教職経験の履歴、これまでの実践、学校での立場、そうしたものを思いつくままに話していった。何を語るか、どれを語るか、どんな受け止め方をされたいか、僅かの時間に様々なことが頭を巡っていった。

続いて2番目の報告者、県内の幼稚園の副園長さんの自己紹介。小学校と併設なので、園長に近い仕事をしている方とのこと、中堅という立場を意識し始めた私の中では、管理職ということでの興味をかき立てられた。次は、教職大学院のストレートマスターの方、そして公民館の主事さん、同じ教師でありながら博士課程で学んでいる方、福井大学の大学生、そして司会へと戻っていった。

自分も含め、こうした場にあまり慣れていないと感じない。しかし、だからこそ、注意深く耳を傾け、自分の経験や知識と照らし合わせながら聞いていた。そして一人一人の話を聞きながら、それぞれの人に、自分の考えをどう伝えたらいいのだろうか、自分だからできる語りとはなんだろうか、相手が集団から固有名詞に代わっていったからこそ、自然とそれを考え始めていた。

報告が始まった。詳しい内容はここでは割愛するが、報告者の自分はなにを学ぶことが出来たか、最後にここを考えてみたい。最近、今回を含めて自分の実践を語る機会をいただくことが多くなってきた。しかし、今回のみなさんの質問に答えながら感じたことは、自分がいろいろなことを「わかっている」と感じているという事実である。しかし、それは、自分の学びが止まってしまっていることを意味しているのではないか。安易に答えているが本当にそうなのか、それができているのか、そこを考える必要性をいただいたように思う。

教師一人一人が授業を語れるようになっていくこと、これが授業改善の第一歩であると考えている。それは他者の授業についての自分の解釈を語ることであり、自分の実践を他者に語ることであるだろう。そして語れるためには語りた場があることが大切である。今回参加させて頂いたラウンドテーブルは、そのような場の一つであった。一緒にテーブルを囲んだ皆様、この機会を作っていただいた方々、ありがとうございました。

## ラウンドテーブルで再認識できたもの

スクールリーダー養成コース1年／福井市豊小学校 中谷 幸子

谷川俊太郎:文『ともだち』にこんな一文がある。「ひとりではできないこともともだちとちからをあわせればできる」今回のラウンドテーブルは、私にとってそれを再発見させてくれた時間だった。また、学校づくりや学級づくりにおいて大切なものに気づかせてくれた時間だった。

1日目、「ZoneA 学校拠点の実践研究」に参加し、「相互啓発的学習観」という言葉に出会った。東京

学芸大学附属世田谷小学校 鈴木 聡先生によれば、「相互啓発的学習観」とは、「今の自分は、仲間とのかかわりの中でこそ成長・発展していけるという学習観」である。Aの発言が、Bにとって価値があるものとなったとする。そして、Bは変容する。しかし、Bの変容はBのみならず、Aにとっても価値があるという考え方である。さらに、この両者の変容を認めることで、周りの人間にとっても大きな価値

値として認識されるのである。こうした他者意識を育むことで、学級集団は学び続ける共同体へと進化・発展していくのである。一人ひとりの学びは、実は周りの友達とのかかわりの中で生まれるものである。だからこそ「聞き合い」「認め合い」「わかり合い」「ひびきき合う」学級集団へと育てていかなければならない。そして、それは、学級の児童・生徒のみならず、教師集団においても学び続ける原動力となるはずである。

2日目のラウンドテーブルでは、京都市ユースサービス協会 横江 美佐子さんより「20代話せるプログラム」の実践報告をお聞きした。京都市南青少年活動センターを拠点とし、20代の若者を対象にした『居場所づくり』のための5年間の歩みをお聞きすることができた。この事業の視点として次の5つの視点が挙げられていた。

- 安心して過ごせる
- チカラをつけることができる
- 話ができる・相談できる

- チャレンジ（挑戦）できる
- 自分を知ること、見つめることができる

場所も対象年齢も違いながら、今の学校教育にぴったり当てはまる視点ではないだろうか。「私は、子どもたちに居場所をつくってやれていただろうか。」と学級の子どもたち一人ひとりの顔を思い浮かべながらお話をお聞きした。

1日目の「相互啓発的学習観」、2日目の「居場所づくり」一見異なるようで、実に多くの共通点がある。二つの異なると思われていた点と点が線で結びついたとき、これからの自分の在り方が見えてきた思いがした。そして、さらに、福井大学のラウンドテーブルにおいて、実践を共に聴き合い、語り合うことの意義について見つめ直すことができた。今回ラウンドテーブルに参加し教育の原点となるべきことを改めて確認できた思いである。

## Newsletter No.106 (18.02.04) より

### 大きな夢 –Zone B2「これからの学部段階の教員養成を考える」に参加して–

#### 一宮研伸大学看護学部 助教 肥田 武

教員養成大学卒業後の2003～2008年度、僕は中学校教員として教育を「実践」した。しかし退職して進学し、研究大学の大学院で教育を「研究」することを学んだ。今は看護大学で一般教養の教員をしているが、今回 Zone B2 に参加し、久々に「教員養成」に触れることになった。特に印象に残ったことを2点述べる。

第1はテーブルで出会った先生方が例外なく、教育に「夢」を語る素敵な先生ばかりだったことである。

A先生とB先生は小中学校教員として、その素晴らしい人生の大半を子どもたちと向き合って過ごした。そして校長としてご活躍になった後に大学教員をなさっていた。今なお類まれな活力で、学部学生の成長を支援し続けている。A先生は「学習ボランティア」、B先生は「教員就職率」という言葉に、教育の夢をみている。

C先生とD先生はそれぞれ教育心理学・教育工学の領域で研究に取り組み、学術的知見の蓄積に最前線で貢献してきた。もちろん大学教員として学部教員養成に携わっている。冷静かつ研ぎ澄まされた思考で、学生に有意義に働きかけている。C先生は「多様性の理解」、D先生は「テクノロジーを用いた教材の開発」という言葉に、夢を重ねている。

「実践」と「研究」という背景の違いこそあれ、夢を追いかける先生ばかりだったからこそ、気恥ずかしさも忘れて、思うことを語り合えた。

第2は（グループ対話の結論でもあるが）「実践」と「研究」との間に盛んな交通を生む、もっと頑強な橋を架けられないかということである。これは語り合いをとおしてメンバーがみることになった、共同の夢なのかもしれない。

教員養成をさらに豊かにすることをテーマとする対話の中で、浮上したキーアイデアは「学部学生教

育に現場教員にも積極的に関わってもらおうこと」だった。こうすれば学生は現場の香りを肌で感じ、学習動機を高められる。他方、自身の実践を振り返りながら責任をもって学生に教える行為は、現場教員にとっても成長の機会となる。

こんなことを考えていた時、学生と現場とを関わらせることは、「研究」のみを行ってきた大学教員には難しいと、C先生が発言した。現場との関係性が必ずしも円滑に構築されるとは限らないからだ。だから「実践」あがりの大学教員がいると話が早いのだと、A先生やB先生も言う。

でも語り合いの終着点はこうだった。本来、「実践」あがりではない「研究」あがりの大学教員であっても、学生と現場とを結びつけられるようになる（それが許される）べきである。そのためには「実践」あがりの大学教員、「研究」あがりの大学教員、（教育委員会なども含む）現場の3者の繋がり方が、今とは少し変化する必要があるかもしれない。

以上、心に残った2点を述べた。主観的に過ぎる感想になってしまったかもしれない（メンバーの先生方、お許しください）。しかしあの場合で共有された数々の夢に誘発されて、大きな夢をみられたことに感謝している。

## ラウンドテーブルに参加して

京都市まちづくりアドバイザー 谷 亮治

筆者は、「住民参加のまちづくり」の援助を生業としている。「住民参加のまちづくり」とは、まちの課題の解決に資するような、まちの共有財産を、そのまちの住民自身の手で作ってあげていくプロセスとして説明できる営みである。

こうして説明すると簡単に聞こえるが、実際やっていくのは簡単ではない。とりわけ困難なことに「まち」というのは、背景も価値観も異なる、全然知らない他人同士が集まって住んでいるという点である。もっとも、そのこと自体は「多様性」と「コラボレーション」を尊ぶ社会通念から見て、豊かな可能性を備えた、理想的土壌の特徴であるように思われる。しかし、多様性は新しい価値を生み出す十分条件とはいえない。

例えば、価値観の異なる他者とは、何かまちに資するような協力的行動をしようにも「こんなことをしたら怒られるのではないか」「誰かを傷つけてしまうのではないか」「否定され、立場を悪くされてしまうのではないか」「うまく騙され、搾取されてしまうのではないか」といった不安がつきまどってしまう。この不安を、エイミー・C・エドモンドソンは「対人不安」と呼んだ。この「対人不安」ゆえに、人々は自分の持っている経験や資源、悩みや不安といったものを自己開示せず、隠匿してしまう。そうするとますます人々の間で没交渉と無関心が生じ、さらに対人不安が強化されるというフィードバック・ループが生じてしまうことになる。この対人不安を解消し、まちの人々が十全に力を合わせられる

ようになるまでには、容易に想像できるように、膨大な時間や労力が必要になってしまうことだろう。そのコストに尻込みすれば、人々はまちづくりという営みから離れていくことになるだろう。

それに対してラウンドテーブルという場は、まったく見ず知らずの人々が、「はじめまして」で出会い、長くて数日、短ければ数時間だけ、共に時間を過ごす場にすぎない。にも関わらず、そこで交わされる対話は実に刺激的で、自分の体験に結びつけることで、次の一步につながるような新しいアイデアや、これまで解決できなかった課題解決のヒントが得られる、大変有意義な場であるように感じられる。そうであるがゆえに、リピート参加する人も少なくないと聞く。まさに、多様な他者との対話と、それによる新しい価値の創出という、まちづくりの現場が求めてやまない理想的状況が立ち現れているのではないか。

当然、このような状況は放っておいて出現するわけではない。キーになるのは、ファシリテーターの存在であるように思われる。見ず知らずの他人が、わずか数時間で、深く繊細な部分まで自己開示し合い、表面的でない意見のやり取りを成し遂げられるのは、他者との対話が、当事者を損なうような事態が発生するのを周到に回避したり、万が一トラブルがあった場合には対策を打ってくれたりするであろう、ファシリテーターという場を作る専任者への期待と信頼ゆえであるように感じられる。

しかし、まちの現場には、このような訓練されたファシリテーターが専任で存在する場合は稀である。その意味で、ラウンドテーブルは、訓練されたファシリテーターという希少な財を使い、「多様な人が集まる場」という、困難だが可能性に満ちた状

況の楽しさを存分に味わえるという、非常に贅沢な場であるということができるだろう。このような贅沢を楽しむ機会に接することができた筆者の喜びが、本稿の読者に少しでも伝わるならば幸いである。

## 実践研究 福井ラウンドテーブルに参加して

和歌山県立みはま支援学校 江川 寛

「今の充実なくして将来の充実はない……」今回のラウンドテーブルを通して、私の心に強く残ったフレーズです。心に残るといよりは、ガツンと身体中に響いたというほうが正しい気がします。この言葉がなぜ心に響いたのかを自分なりに意味付けし、今の自分ができる範囲で言語化してみたいと思います。

「ZoneD 授業研究」で特別支援教育に関わる者同士で話し合ったときでした。重度重複障害児に関わられている方から「障害が重い方に関わっていると、将来を見据えて支援したり、将来の姿を描いたりしづらい」という悩みが打ち明けられました。この悩みをベースに私たちのテーブルでは「どこに向かって支援をしているのか」について語り合いました。語り合いの中で出てきた言葉が「今の充実なくして将来の充実はない」でした。

私は、これまで知的障害の方々と病弱障害の方々に関わってきました。知的障害児者に関わっているときには、将来の生活を見据えて今何ができるかということをよく考えました。授業や個別の指導計画の目標を考えると未来形の目標を立てることが多かったと記憶しています。病弱支援学校へ異動してからは、命のタイムリミットが私たちと比べて短い方と出会いました。これまで知的障害の特別支援

学校で立てていた未来形の目標がしっくりこないと思うことが多くなりました。そこで、当時の校長先生に「命に制限のある方に対して、未来形の目標を立てることは難しいです。そんな方に対して教育ができることはあるのでしょうか?」と尋ねてみました。校長先生は「誰にだって命に限りはある、それが長いか短いかの違いがあるだけ。今、今をしっかりと生きることを支援するのだから立派な教育の目標だと思う。人と人との関係性の中で今を生きる。立派なことだと思う。」と答えていただきました。私は、このときに、目標は未来形だけではなく現在形のものもあるのだと気づきました。ただし、当時の私の中で、しっかりと整理できたものではありませんでした。

今回、ラウンドテーブルで聞いた「今の充実なくして将来の充実はない」という言葉は、前述の校長先生の話とリンクするものでした。だから、私の心にガツンと響いたのだろうと納得しました。今後実践を積み重ねていく中で、この言葉の捉え方は変わっていくのではないかという思いもあります。今回のラウンドテーブルでは、自分の内にある様々な疑問について改めて考えてみる機会を頂いたように思います。ありがとうございました。

## <省察の連鎖>

福井ラウンドテーブルに初めて参加した。きっかけは2つあった。第1は、大学院以来の友人（今は大学教員である）が「省察的实践」の研究をしていることだ。第2は今年出会った同僚（大先輩）がお勧めくださったことだ。「不思議な縁だ」と感じながら福井に着いた。

一宮研伸大学看護学部 助教 肥田 武

さて充実した時間を過ごさせていただいた2日間の終盤（セッションIV中）のことである。ファシリテーターの先生のお人柄が生み出したのであろう、優しい空気。その中で福井大学の学生さんが語ってくれている。僕は心地よく耳を傾けている。テーマは「探求ネットワークでの学び」。探求ネット

ワークとは、長年の試行錯誤を経て福井大学に根付いてきた、きわめて独自性の高い科目であるらしい。そして、これを比類ない優れた学習プログラムにしている、中核的要因はおそらく「学生主体」を貫いていることなのだろう。そう僕に感じさせたのは、語ってくれる学生さんの、安心して満ちた笑顔と誠実な言葉だ。自らの取り組みを、そこで経験したことを、そこで感じたことを、躰みや葛藤も隠すことなく穏やかに語る姿からは、「この学び方でよいのだ」という彼女の確信が伝わってきた。この人はよい教師になるのだろうか。

そう感じながら、今度は自分の仕事のことを考えていた。僕はこの4月から看護大学に勤め、「教養ゼミナール」という科目の取りまとめ役をしている。これは看護師を目指して入学した新1年生を、少人数グループに分け、それぞれに1名の教員を割り当てる。各教員は担当する学生たちの世話役となり、学生にとって初めてのレポート執筆作業を支援する。いわゆる初年次教育プログラムだ。ただしこの科目は昨年度まではなかったため、皆が手探りで進めている。ゆえに学生も教員も各々、不満や葛藤を抱えているようだ。「1度、担当教員全員で集まっ

て感じていることを共有し、次年度のあり方を考え直す場を持ちましょう」と、福井に来る3日前に決まったところだった。僕は取りまとめ役として情けない気持ちでいた。でも福井で探求ネットワークの話を聴きながら覚悟できた。皆の不満や葛藤と向き合おう、入ってきてくれた新1年生の希望を挫きたくない。

僕は「省察的实践」という概念を理解してはいない。しかし誰かが実践を省察する語りを聴き、僕は自らの実践を省察せざるを得なくなった。そして、なぜか分からないが「僕もがんばろう」と思えた。たぶん通常の語りでは、人に明かさないはずの話題を開示することで、何かと向き合う一歩を踏み出せるからではないか。ピント外れかもしれないが、僕はそんな体験をし、そんなことを感じた。僕にとっては有意義な2日間だった。

最初は縁に導かれて、偶然参加することになったと思っていたけれど、それだけではなかったのかもしれない。自分の日々の悩みと向き合うきっかけを僕は探していたのかもしれない。また参加したいと思った。

## 福井ラウンドテーブルに参加して

大阪教育大学連合教職大学院 院生 胡 精吾

福井ラウンドテーブルを知ったのは、大阪教育大学連合教職大学院の講義「行政研修の企画・運営」において、「関西指導主事フォーラム」という研修を院生で企画し、分科会の中でラウンドテーブルを行おうと相談したときである。資料を探したがラウンドテーブルとは一体何であるのか、そこにどのような学びがあるのか分からなかった。担当指導教官である富田教授より薦められて、やはり福井ラウンドテーブルを実際に体験することで、その答えを探そうと考えた。また自身の実践課題研究について報告することで何か学びが得られるのではないかと期待をもって参加した。

ラウンドテーブルを体験して感じたことは「迷い」と「心地良さ」である。参加する前に抱いていた、実践課題研究に対する学びが得られる期待は良い意味で裏切られた。むしろ新たな迷いが残った。それは自身の語りがとてつもなく拙く、報告した実践が聴き手の方に半分も伝わりきれいなと感じるものであったからかもしれない。しかしそれにも関わらず、熱心

に聴いてもらえたことに、その場で共に悩み共に考えてもらえたことに福井ラウンドテーブルの心地良さを感じることができた。

「迷い」と表現したが今振り返ると、この迷いこそが自身の実践課題研究についての学びと成り得るものであった。それは「悩むこと」である。本当にこれで良いのか、他にも良いものがあるのではないかと迷う。はっきりしない、わからないことがあるからそれを知ろうとする。調べたり尋ねたり、様々な行動を起こすことになる。これこそが学びに向かう力ではないだろうか。学び続ける教員に必要なものは、その原動力となる「解決したい、何とかしたい」という課題をもつことだとわかった。

福井ラウンドテーブルとは、省察的協働探究と書き表すことができるのではないか。そこには、語り手が実践を語ることで「本当にこれで良かったのか、他に方法はなかったのか」ともう一度自身の実践を問い直す場がある。聴き手はじっくりと語り手の話

を聴いてその実践の中にある価値を共に探究する。それは主体的で対話的な深い学びの形であると言える。これまでの教師から子どもへの知識注入型の教育から、子どもが主体的に知識・技能を学びとる知識吸収型の教育への転換を示したものが福井ラウンドテーブルであると感じた。今回福井ラウンドテーブルに参加して、私自身が知識注入型の教育を多く受けて来たこと、それだけでは主体性や学びに向かう力が育たないことに気付くことができた。ラウン

ドテーブルの最後に、コーディネーターの早稲田大学村田教授が話された「迷いがあっても良い。ラウンドテーブルとは学びとる場である。」という言葉が心に残っている。これからも学び続ける教員として、優れた多くの実践から学びとるために、また福井ラウンドテーブルに戻ってきたい。その前にまず「関西指導主事フォーラム」において、ラウンドテーブルを企画・運営し、省察的協働探究を大阪で実現させたいと思う。

※ご所属は当時のものです。

---

教職大学院 Newsletter **No.149**

2021.6.19 発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院

福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp

---